一橋論叢　第三十巻　第四號

《資料紹介》

ラヂーシチェフ『人間、その死と不死について』の一側面

Радищев, А. Н. О человеке, о его смертности и бессмертии.

澁谷一郎

一　まえがき

『ペテルブルクからモスクワへの旅』によってシベリヤへ十年の流刑に處せられたラヂーシチェフは、流刑地イリムスクについてからわずか一と月あまりで、[1] この哲學的論稿にとりかかった。彼はシベリヤ流刑時代に、この勞作のほか『シナ貿易にかんする書簡 Письмо о Китайском торге』と『シベリヤ略取にかんするかんたんな物がたり Сокращенное повествование о приобретении Сибири』をしあげているが、[2] この二つが主として彼の恩人――友人ヴォロンツォフ伯[3]への報告をはたす意味をかねて書かれたのにたいし、『人間……』は著者がすでに、ペテルブルク時代（七〇年代の末から八〇年代にかけて）につくりあげつつあった思想――したがって『旅』のなかに、これと共通する思想の芽ばえを多く見いだすことは當然である――[4]を集中的に表現したものであり、彼の著作活動においても、『ウシャコフの生涯 Житие Федора Васильевича Ушакова. 1789』――『旅』の線をのばした思想的な展開の上にたつと見られる。それゆえに『人間……』もまた『旅』と同樣に、時代の社會的な要求によって生まれた、實踐的な性格を濃くおびざるをえなかった。『旅』もこれも同じ思想的基盤の上にたちながら、前者が讀者の感情にうったえる點が多いのにくらべ後者は論理的な說得に力をそそいでいるという、ちがいがある。[5]

ラヂーシチェフをしてこの勞作を書かせた動機は、なによりもまず八〇年代以降のロシヤ知識階級における、ふんい氣の變化であった。エカテリナ二世の治世のはじめ、その「えせ自由主義」に醉って進步的なポーズをとっていた地主＝貴族は、封建＝農奴制經濟の危機に直面し、プガチョフの農民戰爭、フランス革命の影響におびえるとともに、神祕主義に傾いていった。ヴォルテール、ディドロ、エルヴェシウス、ルソーらの本にかわって、アルント、サン・マルテンなどの宗教と神祕主義の書物が、[6] さかんにほん譯され出版された。かつては啓もう文學のロシヤにおける代表者だった知名なマソン――ロプーヒンやノヴィコーフ、あるいはフォンヴィジンも後退しはじめた。[7] かかる情勢のなかでラヂーシチェフは、神祕主義と結びついた觀念論を、一般的なかたちだけではなく（それは『旅』のなかでおこなわれている）、專門的な哲學上の勞作によって批判す

べきだ、と考えたのである。

彼はこのしごとを、人間理性の進歩の歴史として取りあげようとこころざしていた。つぎに擧げる『旅』のなかの一節は、この勞作の出現をすでに暗示している。

「さまたげられるものなき自由思想の、まだ極端をきわめぬうちに、もう迷信にむかいはじめるものも多い。近ごろの神祕主義の著作をひもとくがよい、スコラ哲學の論爭の時代にある思いがするだろう。それは、人間理性が、その表現に意味があるかどうかを考えずに、ことばにわずらわされていた時代、針の尖端にいくばくの靈魂がおさまりうるかといった問題が、哲學の課題とみなされ、眞理探究者たちの解決にゆだねられていた時代だった。[8] ラヂーシチェフがイリムスクのへき地で筆をとった哲學的論稿の對象は、上の引用につきていると言えよう。

『人間……』の完成の時期はあきらかでないが、その筆致からみてイリムスク時代であろう、というのが今日の說になっている。これがはじめて世にでたのは、著者の死後のことであった。[9] 彼はこの論稿のなかで、十八世紀におけるフランス、イギリス、ドイツの哲學上の文獻をひろく利用しながら、[10] 獨自の見解をたてている。しかも著者はこの勞作の內容の高さにもかかわらず、前述したような實踐的・啓もう的な要求にこたえるために、それを、いわゆるアカデミックな形式では書かなかった。彼はそれを《わが友たちに друзьям моим》ささげ、全體をつうじて《友たちへ друзьям》愛する人びとへ《возлюбленным》[11] したしく呼びかけることがまれではない。論稿は著者がこれらの人びとにたいし、疑問をだしては答える對話ないしは《哲學的な書簡》の形式で進められている。

著作は四部からなる。第一部では全般的な命題と論旨の出發點が提起され、人間が自然のなかでしめる位置の規定と、その知的能力の檢討がなされ、最大のスペイスをしめる。第二部では靈魂の死滅性 смертность—motality を立證するもろもろの論據が示され、第三部と第四部では、靈魂不滅にかんする諸學說の特徵づけと評價が與えられる。

(1) この著作のはじめに著者によって日附がしるされている《Начато 1792 года генваря 15. Илимск.》彼は、一七九二年四月四日づけヴォロンツォフあての手紙によれば、同年の一月三日にイリムスクへついたのである。

(2) このほかに未完の作品として、韻文による『闇の天使 АНГЕЛ ТЬМЫ』が殘っているが、これはミルトンの『失樂園』の影響が明らかであるとされている。なおシベリヤにおけるラヂーシチェフの生活について從來の傳記は、それがきわめて多面的な活動でみたされていたことを示す書簡などの斷片をかんたんに紹介していたにすぎないが、『文學新聞』の報じた、つぎの二册は、この時代をかなり具體的にあきらかにするだろう、と期待される。(しかしわが國にはまだ入っていないようである。)

Шмаков, А. Радищев в Сибири. Иркутск. 1952. 100 стр.; Тот же. Петербургский изгнанник. (Исторический роман.) Новосибирск. Кн. 1 : 1951. 312 стр. Кн. 2 : 1953. 335 стр.

(3) 早くからラヂーシチェフを見いだして登用した、この英國式の素養をもつたアリストクラトはその思想をことにするにもかかわらず彼の人格に傾倒し、流刑地にまであつい庇護の手をのばした。『人間……』の執筆で使われた多くの書物は、この人と、ラジーシチェフの亡妻の妹ルバノフスカヤが送つたものである。

(4) 『旅』のなかの、つぎの諸章を參照。《かどで》《スベカヤ・ボーレスチ》《プロンニツツイ》《クレスチツツイ》《ロモノーソフによせて》……など。

(5) 發表方法のちがいも關係してくる。『旅』は匿名出版であるとはいえ、廣く社會によびかける目的をもつていたのにたいし、これは、自分と思想を同じくする少數の友人たちを目ざしたもので、公けにすることを豫期しなかつた、と考えられる。(11) を參照。

(6) たとえば Арндт《О истинном христианстве》, Сен-Мартен《О заблуждениях и истине》など。

(7) たとえば、つぎのような著作 Лопухин《Рассужение о злоупотреблении разума некоторыми новыми писателями.》, Фонвизин《Чистосердечные признания в делах моих и помышлениях》. ノヴィコーフの諸雜誌の論文《Писима с того света в Москву》.《Обхождение с самим собою》.

(8) Радищев, А. Н. Полное собрание сочинений. т. I. М.—Л. 1938. стр. 261. (《Подберезье》)

(9) 《Собрание оставшихся сочинений покойного А. Н. Радищева. С-Пб. 1809～11. 5ч.》(чч. II и III 1809)

なお私は、この論稿の革命前の版は、まだ見ることができないでいるが、ソヴィエト時代に入つて出されたもので、もつとも權威をもつのは、(8) であげた書物の第二卷である。《А. Н. Радищев. Полное собрание сочинений. Том Второй. М.-Л. Изд. Академия Наук СССР. 1941. 429 [i] стр.》(стр. стр. 38—141.)。また第二次大戰後では、つぎの三種類の選集に入つている、《Избранные философские и общественно-политические произведения. М. Госиздат. 1949. 556 стр. ред. И. Я. Щипанова》. 一九五二年版、同名の選集が著者の死後一五〇年を記念して出されたが、これは六七四ページに增補されている (стр. стр 278—418)。《Избранные сочинений, М.-Л. Госиздат. 1949. С вступительной статьей Г. П. Макогоненко. lviii, [i] 855 стр》(стр. стр. 395—522.)

(10) 革命前の研究者たちの注意は、この點（哲學論稿にあらわれた諸思想の外來の源泉）の解明にそそがれていた。

この傾向の總決算としてあらわれたのが Лапшин, И. И. 《Философские взгляды Радищева. Пгр. 1922》（一九〇七年版全集第二卷のなかの同名の研究論文の再版）である。この傾向は、前掲アカデミー版全集第二卷の註にも、はっきり出ている。ところが最近のソヴェートの研究者たちによれば、この傾向こそ誤まれるブルジョア・コスモポリチズムの立場からする西歐追ずいで、著者の思想の正しい解明をさまたげるものであり、彼の見解がロシヤにおける階級闘爭と、ロモノーソフ以來の唯物論の傳統（ロモノーソフ、ポポフスキー、アニーチコフ、コゼリスキー……）のもとに形成されたことを、見うしなわせるものだとされる。

なお『人間……』にかんする研究文獻としては《Горбунов, М. А. Философские и общественно-политические взгляды А. Н. Радищева. М. 1949. 169 стр.》（Глава III Философские и социологические воззрения Радищева.）のほか、前掲の全集および選集の序文と註をあげることができ、より一般的には各種の傳記のシベリヤ時代が役にたつであろう。わが國では、この論稿の内容を紹介したものは、まだないようである。

(11) Гуковский, Г. А. の意見によると（前掲アカデミー版全集第二卷の註）、これは著者が歐露にのこしてきた實在する友人、たとえばヴォロンツォフや市民論叢 Беседующий Гражданин》のグループにおける彼の追ずい者たち、あるいは彼の上の二人の子ども、と考えるべきである。

二 『人間……』における著者の哲學的見解

ラヂーシチェフのこの論稿は哲學上からすると、つぎの二つの課題をたてている。一、哲學流派としての唯物論の根本命題の敍述。二、唯物論の立場から、當代の西歐およびロシヤの著述家・哲學者をひろくとらえていた觀念論と神祕主義に、批判をくわえること。私の紹介の目的は、著者にしたがって、この一と、二の一部をごくかんたんに眺めることにつきている。前掲の諸選集で哲學の項におさめられているこの論稿が、「まえがき」で言ったような環境のなかで生れたとすれば、著者の哲學的見解にとどまらず、社會的・政治的……見解をふくんでいることは、言うまでもない。(1)むしろ見かたによっては、その方に比重がかかっていると言えるのであるが、ここでは紙數のつごうで、別の機會にゆずらねばならなかった。（以下の和數字は、前掲アカデミー版全集第二卷からの引用ページをしめす。）

ラヂーシチェフはまずはじめに、自然現象の解決へ接近する方法的原則について、偏見をさり、現實から切りはなされた純論理的な歸結をさけて、經驗と事實を、世界の認識と眞理探求の指標たらしめよう、と言う（四〇）。

彼は第一の注意を、數百年にわたって唯物論と觀念論のあい

だの爭點となってきた哲學の根本問題の解明に集中し、無條件に前者の立場にたった。彼は言う「精神、すなわち思考體と名づけられるものは、健康または生命が有機體の屬性であると同樣に、精巧に組みたてられた肉體の屬性である。」（一〇三）

「おのが思考をさしむけよ、想像をもやせ。君は肉體の器官によって考える、肉體性 телесность—以外のなにかを思いうかべることが、どうしてできようか？　君の思索を、ことばや音聲のなかからぬきだしてみよ、肉體性が君のまえに全貌をあらわすだろう、なぜなら君がそれであって、他のすべてはおく測だから。」（四三）

著者は、物質を宇宙の精魂 всеобщая одушевленность に歸着させようとする說に反し、意識とは高度に組織された物質の屬性にすぎない、との考えに傾いていた。彼は言う、思想は組織體 тела органические のなかで形成されるにすぎない、思考力は、「組織がよりすぐれている」場合に、いっそう鋭くて完全である（八三）。彼は思想の集中點を人間の頭腦だと考える。「君の思想はどこに生きているか？　そのみなもとはどこだ？」彼はみずから答える「君の頭に、頭腦に。あまねく人の每時の、每瞬の經驗がそれを教える。」（八四）

ラヂーシチェフは、思索を物質から切りはなし、精神を肉體とは別の獨立した存在に變えようとする觀念論者を批判して、皮肉な歎聲を發する「おお、形骸なき存在と言うのか！　もし君がほかのなにに降參しないとしても、酒場の空氣はもちろんのこと君に強くきくだろう……精神も、肉體とともに醉うのだ。」（九三）

思索が器官の物理的狀態に依存することを、著者は多くの實例によって說明する。もしある人を取ってきて、諸段階（幼時・壯年期・老衰期……）における彼の生活をしらべると、各時點での思索方法は、身體の發達に應じていることがあきらかになるだろう。

頭腦は思考の道具であって、記憶・概念・想像はこれに依存する、とラヂーシチェフはかたる。頭腦は時をかぞえる時計になぞらえることができる。それは、すべてのねじや齒車が一定の組合せにあるのだが、それらにもとづいて組みたてられる機能の運行をすぐとめるには、石にたたきつけるだけで十分だ、金屬の切れはしにかわってしまうからだ。彼は言う、腦をひどくうつか、だいなしにしてみたまえ、すべての思考力は煙とかわり、消えてしまうだろう。

同時に著者は、思考の道具としての頭腦と、思考そのものを同一視した十八世紀のある唯物論者たち（たとえばドルバック）の意見にくみせず、つぎのように強調した「われわれの精神または思考力は、それ自身が物質なのではなくて、組織の特有性 свойственность сложения である。」（一〇五）

これとともに私は、彼が二元論者の見解をも反ばくすることばをのべていることを、注意しておこう。

論稿『人間……』において著者は、根本命題の第二點——わ

れわれの思索は、現實の世界を認識しうるか――をも、唯物論の立場から確信ありげに答える。「人間はあらゆることを知る力をもつ。從って彼は認識能力がある。」(五九)

認識論の問題にかんする自分の發言のなかで、彼は十七―八世紀の西歐の思想家たちを批判する。彼は合理主義(デカルト、スピノザ、ライプニッツと感覺論(ロック、コンディヤック)の缺陷を、認識の起源への接近のしかたが、一面的にすぎていたことに見る。理性こそ認識の唯一のみなもとであり、感覺はたえずわれわれをあざむこうとするかのようであるとの理由から、感覺的所與に不信をもってむかうように呼びかける合理主義、感覺的な體驗を認識の唯一の出發點としながら認識のプロセスにおける理性の役割を過少に評價する感覺論、これらはいずれも彼のくみすところとならない。彼は感覺的な經驗と理性による認識を、われわれをめぐる物材認識の唯一の過程において、モメントたらしめようと主張した。「人間の認識は二樣である。第一は經驗であり、第二は考察である。」(六〇)「われわれは感覺 чувственность によって諸物材にかんする表象 представление をもつが、理性によって概念 понятие、すなわちかれらの相關々係の認識 познание をうける。」(七七)これからしてラヂーシチェフは、「われわれの認識能力のこれらの樣相はすべて、存在をことにするのではなくて、この能力は單一・不可分である」(六〇)、と結論する。彼の意見によれば、もし人間が「眞理にたどりつく以前に、不合理……を生みだすことによって、やみと迷いにふみこむとしたら、」これは彼が感覺による認識を理性による認識から切りはなし、かれらを認識の過程で同時にもちいないからだ、と說明されよう(五九)。著者は言う、もし認識の過程で、感覺的ならびに理性的認識を別々に、おたがいに切りはなしてもちいるならば、かれらはどちらも缺陷をもつから、われわれを誤りへみちびくことになろう。

かくてたとえば、黃疸をわずらっている人は、白い對象を黃色いと考え、つんぼの人は、正常な聽覺の人が鐘のひびきをきいているときに、自分の耳になんの變化も感じない。理性についても感覺的所與をなおざりにして、もっぱら諸前提からの歸結によって動いてばかりいると、ひどい誤りにおちいることもまれではない(六一)。それゆえに著者の意見によると理性は、誤りをさけるために、たえず所與の感覺經驗にたよらなければならない。

彼は生得のイデー врожденные идея について、つぎのように考える。イデーは生得ではなくて、人間の生活經驗の過程で得られるものだ。母の子宮にやどった胎兒は、なんの概念・表象・イデーももたない。一定の發達をとげ、獨立した生存のため胎內からでるときにはじめて、外界の對象・物材・現象の影響下に、概念とイデーを徐々に形成する。「豫定の十ヵ月を女の胎內にとどまったのち胎兒は乳兒になった。運動の器官・感覺・聲・生命はみたしつくされた、理性の諸力は既に根をお

ろし、それらの器官はもう準備がなった、印象の知覺のためによくゆきとどいた表（ひょう）таблица—tableau として用意ができた。」（四五）著者は生得のイデーが存在するとの見解を、所與の感覺的經驗と矛盾する・誤まったものと主張する。「君は自分の概念や思考を、すべて感覺からうけないだろうか？　私を信じないとしたら、ロックに目をとおしたまえ。君の思考はすべて、この上なく抽象的なものでさえも、君の感覺のなかにもとをもつことを、彼は君になっとくさすだろう。君の魂は感覺なくして、どうして概念をうることができようか、どうやって思考するのだ？」（九二）

彼の見解によると概念と表象は、外界の物材および對象の反映である。われわれは自分をめぐる諸對象が、いかにして自分の感覺器官に働らきかけるかを知らないが、かれらが存在し、感覺器官に働らきかけてさまざまの形象をよびおこすという事實には、なんの疑いもない。「われわれの外にある形象がいかにして、他の存在物によっておこされた音がいかにして、われわれの內感 внутренность を形づくるのだろうか？　まえの場合には、外部の物體から反射するなにか光線のようなものによって、それがおこるかし……、あとの場合には、われわれの耳のなかにひびきその鼓膜をうつ音は、（おそらくは）弦樂器と同様な振動を神經のなかに生ずるか、あるいは神經液が外界の形象を自分のなかにうけ入れてのち、內部感覺によってそれと似たものを作りだすかするのである。私がすでに言ったことであるが、こうした認識には多くのおく測がある……われわれはわからないから、それがどのようにしておこるかは言わない、けれど言おう、それは存在するのだ。」（五五—五六）

ラヂーシチェフは自分が認識を、運動と發展のなかで眺めていることを强調する。彼はすべての哲學的考察において、われわれの意識から獨立した物質界が存在する、との承認からたえず出發する。「諸物の存在は、かれらにかんする認識の力とは無關係であり、それ自身によって存在している。」（五九）物質性 вещественность またはすべての存在物の基礎にある實體 материя は、それに固有の性質 качество と屬性をもつ。そして實體の重要な屬性の一つが運動なのである。

「われわれはそれ（物質界）が存在し、たえず運動していることを見る。世界には運動が存在しており、運動は物質性から切りはなすことはできないから、それの屬性である、ということを斷言するあらそいがたい權利をもつ。」（八一）さらに彼は、運動を物質の屬性とすることをこばみ、物質を永遠の安靜と不活動にあるなにかである、と見る哲學者や自然科學者を批判する。彼の意見によれば、この種の斷定はそこなわれた頭腦の產物であって、嘲笑をよびおこすにすぎない。

「分別なき人よ！　君が天體の回轉を……見るとき、いたるところに幾千萬の姿をとって散在する生命を目にするとき、物質性の不活動が本來的であって、運動はそれに異質的だと、はたして言いえようか？　自然のなかではすべてが運動し、すべ

てが生きているとき、ごくこまかな塵も、もっとも巨大な物體も、變轉を・破壞を・再構成をまぬがれないとき、はたして不活動への席を見いだし、運動をうとんずるのだろうか？　もし君が活動しないなにものも知らないとしたら、すべてを運動のなかに見るとしたら、存在もしないことについてかたり、あるものをないと考えることは、詭辯ではないだろうか？」（八一）

著者は上のように、運動を物質の重要な屬性であると強調するが、同時に十八世紀フランス唯物論者と同様に、《運動》の概念そのものを、機械論的にあつかっている。彼は運動を、空間における物體の位置の變化として、周囲運動《коловоpазное движение》すなわち閉鎖された場での動きとして理解する。彼はさらに、自然における漸次的な發展だけをみとめて、跳躍を否定する。「自然のあゆみは、靜かな目だたぬ漸次的なものである。」（六〇）ラヂーシチェフは、物質の運動の機械論的な形態の承認だけから出發したために、多くの自然現象を正しく理解し説明できなかった。かくてたとえば、彼は世界の發生の解明について、理神論の立場をとる。

著者は自分の論文の大きなスペイスを、時間と空間の問題にさいた。このことは、彼の時代には現實的な意義をもっていた。と言うのは、一七八一年にカントが『純粋理性批判』を出して、時間と空間は客觀的に存在するものではなく、人間の理性がその助けをかりて感覺による知覺の混とんへ、秩序と法則性をもたらすための、先驗的かつ主觀的な人間思考の形式であることを、證明しようとしたからである。

ラヂーシチェフがカントのこの書を知っていたかどうかは、今のところあきらかでないが、彼は時間・空間を問題とするにあたり、カントの見解に正面から對立する思想をのべている。彼によれば、時間と空間はマテリーの存在の形式である。「……なにをでも想像してみるがよい、どのような存在をでも思いうかべてみるとよい。それにとって必要な第一のものはあるということ бытие であることが、わかるだろう、なぜならそのことなしには、それについての思考もありえないからだ。それにとって必要な第二のものは時間だ、なぜなら諸物はすべて、關連とか自分たちのつながりにおいて、あるいは同時的に、あるいは相互の歸結のなかで理解されるからだ。それにとって必要な第三のものは空間だ、なぜならわれわれにあらわれるすべての存在物の本質は、それらがわれわれに働らきかけることによって、空間ならびに不滲透性にかんする概念をおこさせることに存するからである。われわれの感覺に働らきかけるものがなんであろうと、すべては位置をもち、自分の形象を媒介として、距離にかんする觀念をわれわれのうちに生ずるからである。」（七七）

かくてラヂーシチェフは、時間と空間を思辨の主觀的な形式とは考えることなく、兩者をば、現實に存在するマテリーを反映するところの、客觀的なカテゴリーとしてとらえている。

この論稿は、以上で概觀した哲學的な諸前提を土臺として、主として第二部以後で、魂の死と不死についての問題を展開するのであるが、ここではすでに、それに立ちいる餘白がなくなってしまった。私の語學上の未熟さ理解と整理の不十分さから、論旨の明せきを缺くにいたったことを、はずかしく思う。

（「…」内の傍點は原文のイタリック體）

（1）　ある研究書から引用しよう。「哲學上の唯物論の研究とプロパガンダの領域におけるラヂーシチェフの大きな功績をみとめるについて、彼は自分の注意の中心を、哲學一般の問題の解明ではなくて、人間の社會生活の根本問題、社會發展の合法則性の吟味に集中したことへ、言及しなくてはならない。」ゴルブーノフ、前掲書、一三一ページ。

（一九五四・一二・一一）